

障大連総会に参加して

大阪には障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議という組織があります。毎年5月に総会が行われており、2011年度はさる5月7日に行われ、路交館からも参加しました。今回はその総会に参加した職員の感想です。

淡路聖愛園

児童デイサービスどんぐり 大崎哲広

さる5月7日(土)、障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議(以下障大連)の総会に出席しました。

障大連とは障害者が障大連とは障害児、者に関する政策や制度、その他さまざまな問題について当事者が中心となり、行政当局と交渉や話し合いといった働きかけを行うことを通じて、すべての障害者が地域での自立生活、社会参加とその権利を実現していけることを目指す組織です。

路交館は法人として、障大連に参加しており、聖愛園も参加しています。保育所として障大連に参加しているのは聖愛園だけだそうです。

総会では、2010年度の障害児、者に関して起こった制度上などでの出来事と、それに対してどう対応したかについてのさまざまな報告が行われました。

現在大阪では財政問題の影響を受け、作業所新設の打ち止め・制度廃止に向けた動きやガイドヘルプの利用制限などさまざまな分野での事業の縮小、廃止の方針が打ち出されており、どうしていくかということが最大の懸案事項となっています。

しかしそういった流れとは逆行して、大阪市では特別支援学校の増設が計画されています。その理由としては特別支援学校を希望する親が増えていることや施設が古くなっているからだそうです。しかし、実際は小学校就学を控えた障害児の親御さんが地域の学校入学を希望して見学したとき、あからさまな拒否ではなく「加配の先生の予算がつかないかもしれない」、「エレベーターがないので車椅子で階段の昇り降りができない」と暗に拒否をほのめかすような言い方をするというケースが多く見られます。

大阪市ではこれまでの運動の成果として障害児が小学校に入学する際は親の希望を受け入れるという方針がはっきりと打ち出されています。しかし、そういう地域の小学校の対応について、何の問題提起がなされず、ただ、特別支援学校の増設が検討されていることにはぼく自身納得できないものを感じます。(それ以前の問題として特別支援学校があることがいいかどうかとも考えないといけないのですが)

現在、「障害」ということばを「しょうがい」という表記に変更され、「ともに生きる社会」、「ともに生きる教育」ということばも当たり前のように使用されています。そのような動きは自分たちの社会が一見したところ障害者に対して優しい社会、生きやすい社会になっているように思われます。確かにそういう面もあるかもしれませんが、でも、実際には全然変わってないこともたくさんあるのが現実です。

逆に、問題が見えにくくなっていて難しくなっているように思えます。「ともに生きる社会」、「ともに生きる教育」という言葉が当たり前に使われていてもその中身は以前のもままである現状に対して真正面から異議を唱えづらくなっていることを実感します。

だからこそ、障大連に関わることを通じて、今の自分自身が立つ位置を常に正さなければならないということを実感する時間になりました。